

2025年3月16日(日) 宮崎中部教会主日礼拝説教

説教題：「心の中に主を迎える幸い」 平向倫明（筑紫教会牧師）

聖書：イザヤ書7章14節、ルカによる福音書16章1~13節

ルカ福音書16章の「不正な管理人のたとえ」の御言は、解釈が難しいとされています。なぜ、難しいのでしょうか。それは、この譬えに登場する管理人が、主人の財産を無駄使いしたり、負債の証文を書き直させたりと、好き勝手にやっている悪い管理人のように描かれているからです。更には11節の「不正にまみれた富について忠実でなければならない」という御言にも、「神様が不正を許すはずがない」と思うからです。

私たちは、神様は正しい御方だと信じていますし、何よりも聖書は神の正義に満ちていると信じているからこそ、私たちの良心が、この「不正な管理人のたとえ」の解釈を難しくしていると言えるのです。

では、どのようにしてこの譬えを解釈していけば良いのでしょうか。

解釈を難しくしている原因の一つに、不正な管理人が誰のことなのかが明瞭になっていないことが挙げられます。この管理人が誰のことなのかが分かれば、この譬え全体を紐解く鍵になります。

結論から申しますと、「不正な管理人」とは、イエス様のことだと考えられます。

突然、このように申しますと、「イエス様がこのような不正な管理人であるはずがない。イエス様は何も不正などしてはいない。」と、怒り出す人がいるかもしれません。

それでは、この「不正」とは、何の事を言っているか、まずは、その事から見て行きます。

16章5~7節には次のようにあります。

「そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。6『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』7また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』」

この御言には、主人に借りのある二人の負債者が登場します。管理人は、最初の負債者の「油百バトス」の負債を半分減らして、証文を「油五十バトス」に書き直させました。別の負債者の「小麦百コロス」の負債は、五分之一減らした「小麦八十コロス」に証文を書き直させたのです。

この証文の書き直しは、この世では、公文書偽造罪にあたる犯罪です。管理人は不正を働いたわけです。

では、このような証文書き直しの不正をしないで、負債を正しく処理するためにはどうすれば良かったのでしょうか。それは、負債者自らが、自分の負債を主人に返すことです。これが正しい負債の処置の仕方です。

このように管理人が証文を書き直させて負債を減らした事を、「罪と罰」の関係に置き換えてみたいと思います。

この世には「法律」があります。もし、誰かが罪を犯して有罪となり、罰を受けることになったとすれば、罪を犯した本人が罰を受けると言うのがこの世での正しい裁き方です。

もし、罪を犯した本人に成り代わって、他の誰かがその罰を受けたとすれば、日本の法律では、「犯人隠避罪」に問われてしまいます。

この事を今度は、キリスト教の教理に照らして見てみます。

私たち人間の罪とは、神様に対する負い目＝負債のことです。本来であれば、罪を犯した本人がきちんと罰を受けるのが、この世における正しい裁き方でしたが、神様は、罪人が受けるべき罰を、本人にではなく、神の独り子イエス・キリストに負わせられたのでした。イエス様は、罪人の身代わりとなって十字架で処刑されたのです。

なぜ、神様は、御自分の独り子を犠牲にしてまでも、私たち罪人を救おうとなさったのでしょうか。その理由は、神様が、私たち人間をそれほどまでに愛しておられたからでした。

イエス様は、父なる神のこの御心を知って、かつ、地上の人間たちの罪に苦しむ悲惨な姿をご覧になって、父なる神様と私たち罪人の両方を愛され、御自分の意志で、地上に降って来られ、人間となられ、父の御心を成就させるために、十字架の上で死なれたのでした。

「不正な管理人」との言い方は、私たち罪人自らが罰を受けなくて、イエス様が私たちの身代わりとなって罰を受けられたことを、この世の法律に照らして言う言い方です。

これに対し、この世的には不正に映るイエス様の身代わりの死を、信仰の光で照らして見ると、それは私たち罪人を救おうとなさった「神様の愛」となるのです。

このようにこの譬えを見て来ますと、「不正な管理人とはイエス様のことである」との解釈に一步近づくのではないのでしょうか。

しかしながら、ここまでの説教を聞いて、「何か変だぞ」と思われた方もおられると思います。恐らく次のような疑問が浮び上ってくるからです。

「イエス様の十字架の死によって、人の罪は 100%完全に赦されたのではなかったか。それなのに主人に負債のある者たちは、負債が半分とか五分の一しか減らされていないではないか。どうして、負債の全てが免除されなかったのか。」という疑問です。

それでは、「人間の罪は、どのようにして赦されたのか」と問い掛けてみるとどうでしょうか。即時に「イエス様が十字架にお架かりになって、死んでくださったからだ」との答えが返ってくと思います。

しかし、本当にそうでしょうか。イエス様が十字架で死んでくださったから、私たち人間の罪は、無条件に赦されたのでしょうか。

この問に対する答えを聖書の中から見出すと次の様です。

- ・マルコ福音書 16 章 16 節「信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」
- ・ヨハネ福音書 3 章 16 節「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

このように、聖書の御言は、「主イエス・キリストを信じれば救われる。信じなければ救われない」と言っています。確かに、イエス様は十字架にお架かりになって、人類の救いのために死なれました。しかし、例えイエス様が十字架の御業によって罪人の身代わりとして死なれたとしても、このイエス様を救い主として信じることができなければ、その信じない人は決して救われる事はないのです。これは、聖書がそう言っているのです。

それでは、イエス様を信じることと、イエス様が私たちの身代わりとなって十字架にお架かりくださったこととは、どのように関係しているのでしょうか。その事が、本日の譬えの中に示されています。

この管理人は、なぜ、主人に負債のある者たちの負債を軽くしてあげたのでしょうか。

それは、この管理人が、自分の住む家を確保するためでした。管理人は、間もなく管理人の仕事をやめさせられて、自分の住む家がなくなってしまうからです。そのために、主人に負債のある者たちの家に、自分を迎え入れてもらおうとしたのです。この迎え入れてもらうための方法が、負債者の負債を軽くしてあげる事でした。

この管理人は、自分の住む家を得るために、他の方法も考えたようです。

16章3-4節に、次のように記されています。

「管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』」

「土を掘る力もない」とは、力づくで家に押し入ろうとしても、力づくでは家に入れないことを言っています。その理由は、この後の所でお伝えします。

次の、「物乞いするのも恥ずかしい」とは、「頼み込んで何とか家に入れてもらう」と言う事です。しかし、このようにして家に住まわせてもらったとしても、やがて煙たがられ、邪魔者扱いされて、居心地の悪い環境になってしまうのです。従って、頼み込んで家に入るやり方もだめなのです。

そこで考えたのが、主人に負債のある人の負債を軽くしてあげると言う方法でした。この方法では、負債者は、管理人を喜んで自分の家に迎え入れてくれるからです。この方法であれば、管理人と負債者の両者が喜んで、一つの家に住むことができるのです。

また、「負債者の家」とは、「人の心」を譬えています。人の心の中にイエス様が住むのです。しかし人は、なかなか自分の心を開いてイエス様を迎え入れようとしません。

その原因は、人の心が頑固だからです。このため、人は自分に負債＝罪があることに、なかなか気付こうとしないのです。自分こそが最高であり、自分を中心に世の中が回っていると思いがっているような存在、それが本来の人間だからです。

そのような人間の頑なな心を開かせるものは何でしょうか。それが、負債を軽くしてあげることでした。つまり、人間が負うべき罰を、イエス様が身代わりとなって負われたと言う出来事であったのです。

イエス様の身代わりの十字架の死と言う出来事によって、神様は如何に人間を愛しておられるかを表されました。人間は、この神様の愛に心打たれて、それまで閉じていた心を開いたのです。こうして人間は、自分の心の中に神の愛であるイエス様を迎え入れるようになったのです。

先ほどの「土を掘る力もない」とは、力づくでは人の心を開くことはできないと言う事を示しています。人の頑なな心を開くことができるのは「神の愛」のみであったのです。

しかしながら、私たち人間は、なぜ、心の中にイエス様を迎え入れなければならないのでしょうか。つまり、「なぜ、イエス様を信じなければならないのか」と言う事です。

それは、聖書に「イエス様を信じれば救われる」と書いてあるからではありますが、「なぜ、イエス様を信じれば救われるのでしょうか」と言う問題です。

イエス様は、私たち罪人の身代わりとして、罰を受けてくださいました。これ自体が、とても有難い御恵みです。しかし、人によっては、このことを逆手にとって、「な〜んだ、悪いことをしても、自分に代わって、罰を受けてくれる人がいるんだ。これは、何て便利なんだろう。それじゃあ、罪を犯す度に、この人に言って、代わりに罰を受けてもらえばいいじゃないか」と思ったとすればどうでしょうか。このような考え方は、イエス様の十字架の犠牲を悪用することになってしまい、罪を増し加えることになってしまいます。

先ほどの、管理人によって負債を減らしてもらった人たちには、それぞれ油百バトス、小麦百コロスもの負債がありました。油百バトスとは、200ℓのドラム缶で11.5本分です。小麦百コロスとは、200ℓのドラム缶で115本分です。

これほどの負債が溜まるまで、この人たちは一体何をしていたのでしょうか。少しでも主人に負債を返そうと努力したのでしょうか。とても努力をしていたとは思えない負債の大きさです。

そのような人たちの負債を管理人が全て無くしてあげたとしても、また、いつの間にか負債が増えてしまい、切りがないのではないのでしょうか。

それだからイエス様は、人の心の中に住む必要があったのです。人の体は、その人の心が動かします。その心にイエス様が住まわれると言うのは、その人の心をイエス様が御支配なさると言う事です。イエス様の声が、その人の心の中に響き渡るのです。そうすれば、心の中におられるイエス様によって、その人は、罪の誘惑の方へなびいて行かなくなるのです。イエス様が本当にその人の心の中に住んでおられるのなら、必ずそうなるのです。

もし、何度も罪を犯すことを繰り返してしまうのであれば、イエス様が、その人の心の中には住んでおられないことになります。その人に、真の信仰があるかないかは、その人の行動で分かってしまうのです。

この「不正な管理人のたとえ」は、神の国が如何に素晴らしい所であることを示そうとしています。そのことに伴い、神の国へ迎え入れられる者が、どの様な者であるかも示しています。不正な管理人がイエス様のことであると解釈できれば、この譬えが示す神の国のことも分かって来るので、先に進みたいと思います。

10 節で、「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。」とされています。

ここでの「ごく小さな事に忠実な者」とは、「この世でイエス様の十字架による救いを信じて従う人」のことです。「大きな事にも忠実である」とは、「天の御国でも忠実である」と言う事です。イエス様に忠実な人は、父なる神様に対しても忠実でいられるために、天の御国へ迎え入れてもらえるのです。

しかしこの世は、イエス様に対して忠実な人ばかりではありません。イエス様は、「神を愛し、隣人をも自分のように愛しなさい」と教えておられます。そのイエス様の教えを守れないとなれば、イエス様に不忠実な人となってしまいます。

世界に目を向ければ、ロシアがウクライナに攻め入っています。自分の国の領土を広げるために、隣の国の領土を奪おうと貪欲に駆られています。全くもって、イエス様の教えに不忠実な姿を曝^{さら}しています。

もし、イエス様に忠実な人と不忠実な人のどちらも天の御国へ入って行けるとすれば、天の御国はどうなってしまうのでしょうか。天の御国においても、この地上と全く同じように、争いが起こったり、人を騙したり、強盗に入ったりするようになるのではないのでしょうか。

それだから神様は、イエス様に心を開いて、イエス様を心の中に住ませた人だけを、つまりは、イエス様を信じた人だけを、天の御国へと迎え入れられるのです。この事を聖書は、「イエス様を信じる者は救われる」と言っているのです。

11 節には、「だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」とあります。「不正にまみれた富」とは、私たち罪人の身代わりとなって十字架の刑罰を受けて下さったイエス様の御恵みのことを「富」と言っています。「まみれた」という言葉は、ギリシャ語の聖書原典にはありません。聖書原典には、ただ「不正な富」と記されているだけです。そして、「本当に価値あるもの」とは、天の御国のことです。

ですからここは、「イエス様の十字架の御恵みに忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」と言っているわけです。更に申しますと、「忠実」と訳され言葉には、「信頼する」とか「信じる」と言う語源的意味があり、「任せるだろうか」と訳された言葉にも、「信じる」と言う意味があります。そうしますと、この御言は、「主イエス・キリストの身代わりの十字架の死によって、あなたがたが救われたと信じる事ができないとすれば、誰が、天の御国のことを信じることができるだろうか」と言っているのです。

父なる神様が、御自分の独り子の命を犠牲にしてまでも、私たちを天の御国へと迎え入れようとなさっておられることを思うとき、天の御国とは、どれほど素晴らし所なのだろうかと思わされます。イエス様が、この父の御心を知り、罪に苦しむ私たち人間を憐れんでくださり、父と私たちを愛されて、父の御心の成就のため、私たち人間の救いのために、ご自身をお捧げくださったのです。私たちにとって思いも寄らないこの大きな出来事を、10 節では「ごく小さな事」と言ったのです。そうであれば、「大きな事」と言っている天の御国とは、どれほど素晴らしい所なのでしょう。恐らく、人間には想像もできないほどの素晴らしい所なのだと思います。

私たちが、そのような素晴らしい神の御国へと迎え入れられるための唯一の条件が、主イエス・キリストを私たちの心の中に迎え入れて住んでいただくことです。

本日のもう一つの御言は、イザヤ書 7 章 14 節です。ここには、「それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。」と記されています。

クリスマスの時に良く読まれる御言だと思います。神の御子、主イエス・キリストが私たちの心の中に住まわれるために、御子は地上にいらしたのです。

「インマヌエル」とは、「神は我々と共におられる」(マタイ 1:23)と言う意味です。まさに、イエス様が、私たちの心の中に住んでくださり、ひと時も私たちを離れずに居てくださるためにこそ、主イエス・キリストはこの世に来られたのです。

この尊い御恵みを噛み締めながら、心の中に住んでおられるイエス様と共に、神の御国へ向かって歩んでまいりたいと願います。